

# 大英博物館所蔵「ゑんの行者」絵巻について

小澤 弘

## はじめに

修験道の祖とされる役の行者（小角）についての伝記や縁起を絵巻としたものは、その数が少ない。現在までに見聞した「役の行者絵巻」は、次の八本である。

### 「役の行者絵巻」の諸本のリスト

- A 武藤本（旧慈眼坊・埼玉県比企郡都幾川村塔の峯）
- B 大阪青山短期大学図書館本（中野莊次旧蔵本）
- C 桜本坊本（金峯山桜本坊・奈良県吉野）（山伏文化会館保存）
- D 彰考館旧蔵本（茨城県・水戸市）
- E 個人蔵本（東京都）
- F ニューヨーク公立図書館（スペンサーコレクション）本（アメリカ）
- G ベルリン国立図書館本（ロシア文化財団国立図書館）（ドイツ）
- H 大英博物館本（イギリス）

このうち武藤本については、すでに調査・研究の成果を論文として<sup>(1)</sup>いる。また中野莊次（友山文庫）旧蔵本（大阪青山短期大学図書館本）については、すでに中野莊次所蔵の際に調査を行い、その成果についても武藤本との比較研究をすでに

提示してきた。<sup>(2)</sup> また桜本坊本は調査した時点で見れない状況となっており、彰考館旧蔵本は『国書総目録』に所載された土佐光信画「役行者縁起絵詞」であるが、問い合わせた所、不明であるという。東京の個人蔵本およびニューヨーク公立図書館本、ベルリン国立図書館本<sup>(3)</sup>は、宮家準編『修験道辞典』にその存在が所載されている作品である。ベルリン本については、かつてベルリン国立博物館東洋館の副館長シュテフィ・シュミットに聞いて、その存在の確認をし、またシュミット女史とともに調査・研究を行う予定でいたが、残念ながら東西ドイツ合併時に来日した直後に帰国して間もなく女史は急逝され、いまだに実見を果たせないでいる。ニューヨーク公立図書館のスペンサーコレクション本<sup>(4)</sup>も未見である。

さて、武藤本や旧中野本の研究を通じて、これらの「役の行者絵巻」に重大な関心を持っていた私にとって幸いなことに、一九九二年の九月と十二月の二度にわたる大英博物館所蔵の日本の絵画資料調査の折り、かねがね研究対象としていた「役の行者絵巻」の一本を実見する機会を持てた。そして、同館日本部学芸員ティモシー・クラークの好意により、この絵巻の精査することが出来た。

本稿は、この大英博物館所蔵の絵巻の詞書の翻刻、およびその翻案、そして仕立て直しの際に起こったと推察する、画や詞の料紙の錯簡を正すための考察を行った結果を報告することを目的とした。本絵巻についての成立にかかわる研究の成果については、紙数の都合上、別稿とする予定である。

註1 小澤弘「「役の行者絵巻」について―都幾川村武藤家本と京都中野家本―」『立正大学北埼玉地域研究センター年報』第十二号所収、一九八九年

山口桂三郎・小澤弘「武蔵国比企郡の多武峯慈眼坊と武藤家「役の行者絵巻」について」『立正大学北埼玉地域研究センター年報』第十三号所収、一九九〇年

小澤弘「北埼玉地域の宗教絵画」『立正大学北埼玉地域研究センター年報』第十四号所収、一九九一年

武藤本に関する研究は、その他つぎのものがある。

武井正弘翻刻・解題「役行者繪卷（舊慈眼坊・武藤家本）」『山岳宗教史研究叢書』第十七卷―修験道史料Ⅰ―所収

註2  
註1

藤井隆翻刻「えんの行者」『室町時代物語大成』第三卷所収、一九七五年

なお「役の行者絵巻」に類似する作品に、「箕面寺秘密縁起絵巻」「神於寺縁起絵巻」などがある。

註3

ベルリン本については、エヴァ・クラフト・北村浩・沢井耐三編著『西ベルリン本お伽草子絵巻集と研究』（未刊国文資料四期第十冊、一九八一年）に、詞書の翻刻文および画全十七図の写真版、解説が所収されている。その解説によれば、古浄瑠璃正本『役行者』を奈良絵草子絵巻化した可能性が高いという。また阪口弘之から教示をうけた話として「岩瀬文庫本（『役行者』が古浄瑠璃の語りを草子化した本である）ことが載り、「さる程に」「さる間」といった各段の出だしの文句が古浄瑠璃の語り口であり、ベルリン本や大英博物館本の絵巻の成立にかかわる重要な指摘がなされている。

古浄瑠璃正本『役行者』は、岩瀬文庫本（西尾市立図書館所蔵）が『古浄瑠璃正本集』第八（角川書店、一九八〇年）に挿画十七図とともに所収されている。その解題に、『役行者』は万治（一六五八―六一）頃刊行の上方本かとされ、『松平大和守日記』万治四（一六六二）年二月十三日の条の浄瑠璃本目録に、この本の名が挙げられていることを指摘している。また井上播磨掾にも、同名の語り物があった（延宝二年春刊『忍四季揃』）ことも述べられているが、この正本は不明であるとのこと。ベルリン本や大英博物館本の下巻にある「月若殿の花売り」の段は、この『忍四季揃』下巻の「ゑんのきやうしや花うりの四き」と類以するので、興味深い。なお大英博物館本は、このベルリン本とほぼ共通した内容を持つことから、祖本は古浄瑠璃正本『役行者』か、もしくは延宝二（一六七四）年刊『忍四季揃』などが関係するものと推察される。しかし、画に関して言えば、大英博物館本とベルリン本とは、画法のみならず（絵師が異なる）、構図が逆向きになっているとか、いくつかの図に登場人物に相違が見られるなど、画題は共通でありながら、その表現において相違が見られる。なお詳細は、別稿とする。ベルリン本（プロシア文化財団国立図書館所蔵）「えんの行者」絵巻全三巻は、紙本著色の奈良絵本絵巻で、初代駐日プロシア大使であったマックス・フォン・ブラントより一八六二年に同財団へ寄贈された作品である。法量は、幅三三・三cm、長さは上巻九七八cm、中巻八八四cm、下巻一〇五三cmである。金泥料紙下絵あり。画十七図で、題簽に「えんの行者 上（中・下）」とある。所蔵番号は、SB Libri japon 482 である。

また、ILLUSTRIERTE HANDSCHRIFTEN UND DRUCKE AUS JAPAN”（プロシア文化財団所蔵の全和書の総カタログ

完成による展示図録が、一九八一年にエヴァ・クラフト（プロシア文化財団国立図書館東アジア副部長）の著によって刊行されている。その第十六番に、ベルリン本の「えんの行者」絵巻がカラー図版一葉とともに解説が所収されている。

註4 『西ベルリン本お伽草子絵巻集と研究』の解説の末尾に、奈良絵本の「役の行者」絵巻に「スペイン・コレクシオン蔵、日本絵入本及絵本目録」（一九六八年）の二四番に「役行者物語絵巻、一卷」が所収されていることが記されている。また、スペイン・コレクシオン本に関する最近の研究として、辻英子「ニューヨーク公立図書館蔵『役行者繪巻』—解説と翻刻—」（『佛教学』第十七号、一九九三年）がある。

### 大英博物館所蔵「えんの行者」絵巻

英国のロンドンにある大英博物館に所蔵される「役の行者絵巻」は、その題簽に「えんの行者」とあり、全三巻の紙本着色絵巻である。その三巻が収められている桐箱の蓋には、「神變尊者繪傳」と墨書されている。「神變尊者」とは役の行者のことで、寛政十一（一七九九）年の役の行者千百回忌にあたり、追贈された尊称「神變大菩薩」のことである。また同面に、別筆で「Bain」の墨書きと「C」の文字の鉛筆書きが認められる。箱は、縦三九・二cm、横二二・八cm、高さ二〇・六cmである。そして、248・249・250の所蔵番号をペン書したラベルが貼られている。

この絵巻は、一九〇二年に大英博物館本の館蔵品となったが、その際の収蔵年号が絵巻の各所に押印されている。本絵巻の寸法は、全巻とも幅が三一・九cmで、長さは上巻が八五・一cm、中巻が八五・七cm、下巻が九一・四・六cmである。合計すると約二六mにも及ぶ。画や詞書の料紙など個々の寸法については後掲した。

三巻とも、画面には金箔の砂子蒔きによるすり霞の表現や、詞書料紙下絵が金泥画（松・草・花・波などを描く）となっていて、武藤本や旧中野本などの装飾性の高い作品と類似している。しかし、その詞書や画の内容は、これらのものとは趣を異にしている。それらを列記すると、次の通りである。

- a. 役の行者（小角）の父について、大和国葛城郡の賀茂役氏の末流である権右大弁刑部少輔「とみかた」なる者であるとすること。

- b. 役の行者の幼名を「朝日丸」と称すること。
- c. 弟の出生にかかわる話と、弟の名を月若と称すること。
- d. 「とみかた」家の後見人として、豊浦八郎「ためつき（為次）」なる者が登場し、母と月若を守護する譚。
- e. 深山隠れの月若が、その心境を花尽し・虫尽しなどでなぞらえる文章。
- f. 文武帝の泊瀬行幸の途中、花売りの月若と出会い、それによる免罪の譚。
- g. 山伏の由来譚（謡曲「安宅」や歌舞伎の「勧進帳」の一節のような台詞）。
- h. 行者が西天竺へ生身の釈迦如来を拝しに行く譚
- i. 一言主命が女体である譚。
- j. 「たかまの中将」なる者が追捕する譚。

このように、通例の伝記には例のない人物の登場や、身分や名前などの特定、そして類例のない説話が組み込まれている。

また大英博物館本は、詞書の翻刻や画の分析を行ってみた結果、詞書と画の両方に錯簡が認められた。おそらく、あの時期に表装が剥がれてバラバラとなり、その後の再表具の際に、順序を間違えたものと推察する。それは少なくとも、一九〇二（明治三十五）年に大英博物館に入る以前のことであろう。

そこで、ここでは詞書（原文）の翻刻と、その翻案を掲載した。「詞上1」は上巻の詞書の第一段を示し、「画上1」は上巻の画第一図を示す。また詞書の料紙の終わりに段落記号（ㄱ）を付け、料紙の継なぎの錯簡に関する考慮をした。そして料紙の通し番号を、その最初の行頭に○内に数詞で示した。詞書の翻刻は、原文の改行通りに改行したが、一部原文では散らし書きをしている部分では適宜の改行とした。なお翻案では「とみかた」「ためつき」に傍線を付した。

錯簡については分析の結果、同系統本のベルリン本等の比較も含めて、本来の順序が策定できたので、翻案の上部に（）内に順番の数詞を付して提示した。しかし詞書の一部は、表具が剥がれた際に脱落したと思われる。この脱落した詞書については、\*印を付して全通番号を（）内につけ、ベルリン本から補って、後掲した。八枚の詞書料紙が脱落したもの

と思われる。また画についても錯簡があるので、翻刻の画の説明の下部に【】内に復元した順番の数詞を付した。また、本来連続していたと考えられる画については、その右・左を、その中に示した。

つまり、本絵巻の現状については、上段(翻刻)を見ることで通覧でき、また本来あるべき順序の絵巻の状態は、下段(翻案)の( )内番号の順で判るようにした。(全体の構成復元案を後掲した)

大英博物館本の詞書の翻刻・翻案、および画についての分析は、類以するベルリン本や古浄瑠璃正本『役行者』などを参照した。細かい異同はあるが、ここではその対称表の掲載は紙数の都合上省いた。

役の行者に関する一代記などについては、『日本霊異記』『金峯山本縁起』『三宝絵詞』『扶桑略記』『元亨釈書』や『役行者本記』『役行者顛末秘蔵記』などが知られているが、そのほか浅井了意著といわれる貞享五(一六八八)年刊の仮名草子『役行者縁起』や同じ貞享年間と考えられる奥浄瑠璃『大峯の本地』(『古浄瑠璃正本集』第八)、そして元禄十四(一七〇一)年頃の山本河内掾作の古浄瑠璃正本『役行者伝記』なども視野に入れて考えなければならないであろう。

それは、こうした絵巻が、単に宗教にかかわることのみならず、絵画や説話文学、そして浄瑠璃などの音曲、語り物、お伽草子などの、さまざまな分野の交流のもとに制作された時代の背景を考慮しなければならないということである。

なお『役行者縁起』の初版本が、『葛城物語』であるということを、坂巻甲太・村野享子が「翻刻葛城物語」(『東横国文学』第十三号、一九八一年)で指摘している。

さて大英博物館本の画に関しては、同一構図を用いている図が多い。例えば、朝日丸の邸宅を描く場面では、【画1】の左部(【画上1】)と【画2】(【画上3】)、【画3】(【画上4】)、【画4】(【画上5】)、【画15】(【画下3】)は、順勝手の向きで邸宅が描かれ、ほぼ同様の構図となっている。また、一言主の使いの末社の神の讒訴の場面【画9】(【画中3】)と、母を捕らえられた行者の訴えの場面【画12】(【画下1】)は、内裏の構造や人の配置などがほぼ類似した構図となっている。そのほか【画9】の末社の神の二人の構図は、「融通念仏縁起絵巻」からの引用したものであろう。

いずれにしろ、この大英博物館本「あんの行者」絵巻は、武藤本や大阪青山短期大学図書館本(旧中野本)と同系統の奈良絵本草子絵巻群に入る作品である。ベルリン本も、金泥画装飾料紙下絵や、画の金切箔や、すやり霞の手法では、

これら三本と同様の技法を持つ奈良絵本草子絵巻であるが、絵師の系統は別である。

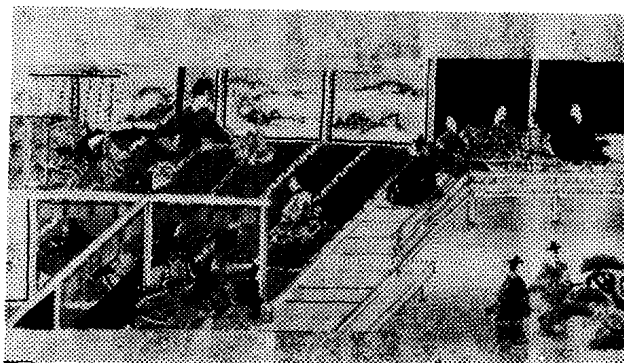
制作期は、役の行者千回忌の元禄十二（一六九九）年頃を下限とし、古浄瑠璃本から奈良絵本草子絵巻への転換期の十七世紀中葉を上限とするものであろう。こうした奈良絵本系の装飾料紙下絵をもった絵巻群を考慮に入れながら、その詳しい分析は後日を期待したい。

後期 本稿を成すためにあたり、調査・研究および写真版掲載等の許可をこころよく与えて下さった所蔵機関である大英博物館およびローレンス・スミスをはじめとする日本部のスタッフの諸氏に感謝の意を表する。特にティモシー・クラークには、格別の配慮をたまわったことを記して感謝する。また翻刻・翻案に御教示いただいた跡見学園女子大学の岩田秀行にも、感謝する次第である。なお、この研究の一部は一九九三年八月三日に、江戸町人研究会で発表したものであることを付記しておく。

追記 本稿の初校の段階で、一九九四年一月上旬になってから聖徳大学助教授の辻英子氏が、一九九三年九月に既に『佛教文學』第十八号に大英博物館本の翻刻原稿を入稿された旨を知った。辻氏は、一九九〇年に大英博物館での調査をされたという。辻氏の本絵巻に関する研究の着手について、専攻分野が違うため今日まで氏の研究の経過を確認できなかったことは遺憾である。ここに、辻氏の研究に対し敬意を表し、氏の一日も早い御発表を心から申し上げる。氏の研究成果も是非参照されることをお勧めしたい。

なお、すでに大英博物館本については市古貞次が一九七八年十一月の東京大学中世文学研究会で、第一回国際奈良絵本会議に触れて、大英図書館に「役の行者」が所蔵されている旨の報告をされ、またドイツのエヴァ・クラフトが披見し、北村浩が調査を進めていることが、前掲書『西ベルリン本お伽草子絵巻集と研究』二一八頁に記されている。クラフトや北村の研究成果については、未確認である。なお、大英図書館とあるのは、その特長から大英博物館所蔵本のことであると考えられる。

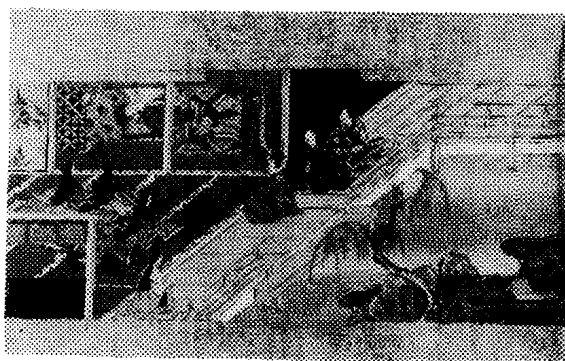
# 大英博物館所蔵「ゑんの行者」絵巻の画



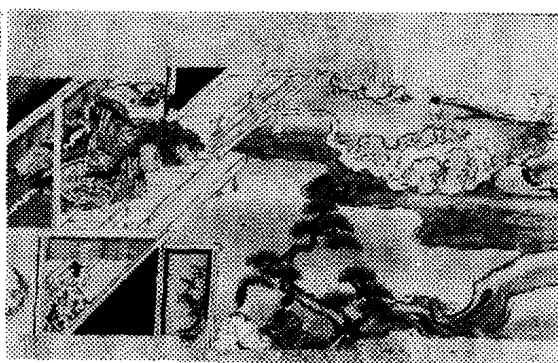
〔画上 1: 朝日丸と両親〕【画 1 左】



〔画上 2: 門前の従者〕【画 1 右】



〔画上 4: 父病に臥し、母の嘆き〕  
【画 3】



〔画上 3: 朝日丸飛雲に乗って父母と  
の別れ〕【画 2】



〔画上 6: 洞を住処とする行者と守護  
する獣〕【画 5】



〔画上 5: とみかた殿の供養〕【画 4】

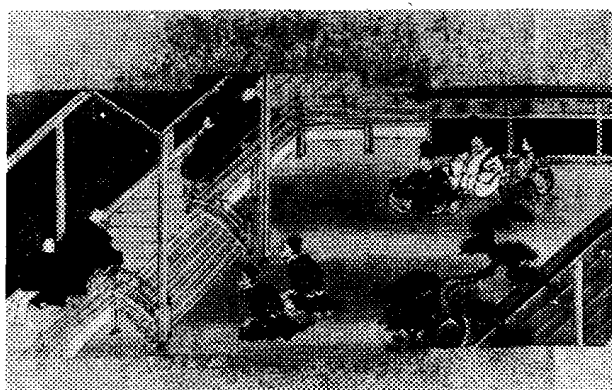




〔画中 1: 熊野権現の出現〕【画 7】



〔画上 7: 行者に打ちかかる盗賊〕【画 6】



〔画中 3: 葛城山の末社の神、一言主の命にて、行者の事を朝廷に訴える〕【画 9】



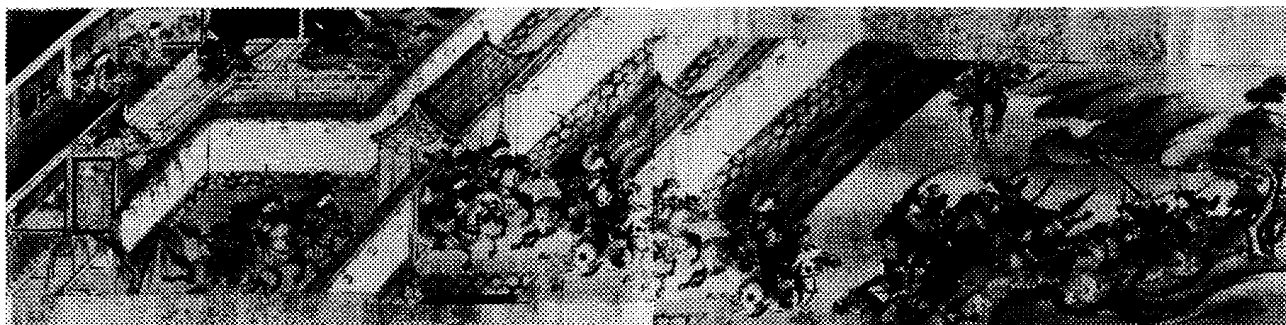
〔画中 2: 行者、葛城山より金峯山に岩橋を架けんとす〕【画 8】



〔画中 5: 行者、官軍の攻めを、鬼神を使い防ぐ〕【画 10 左】



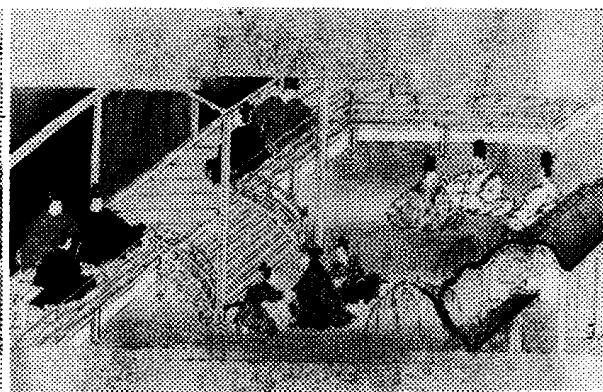
〔画中 4: 官軍、行者に打ちかかる〕【画 10 右】



〔画中6：官軍、行者の母と弟の邸を攻める〕【画11】



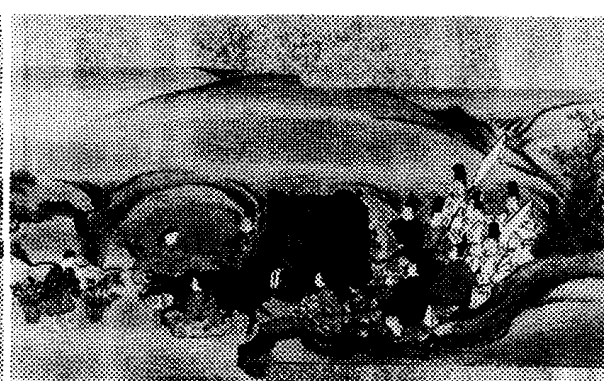
〔画下2：行者、伊豆へ流され、母との別れ〕【画13】



〔画下1：行者、帝に無実の讒を訴え、白洲に据えらるる〕【画12】

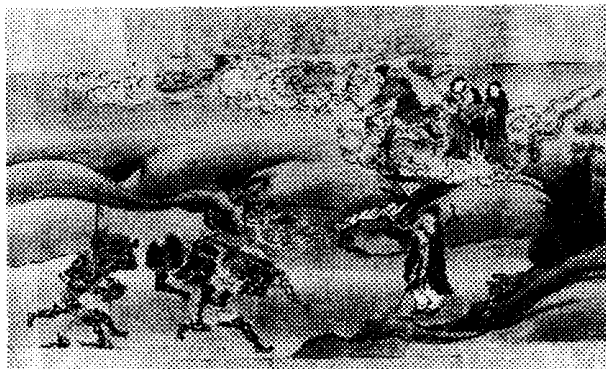


〔画下5：帝泊瀬へ行幸の途中、月若の花売りに会う〕【画14左】

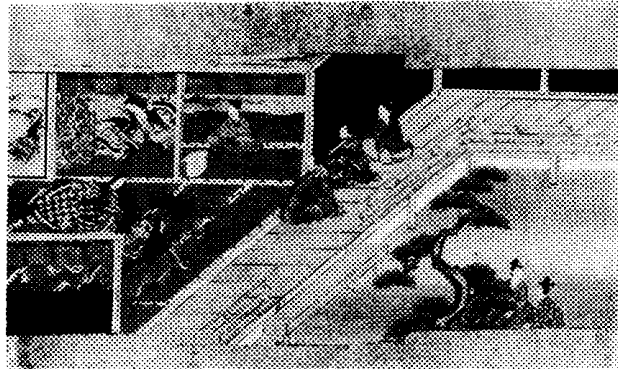


〔画下4：帝泊瀬へ行幸の途中、月若の花売りに会う〕【画14右】

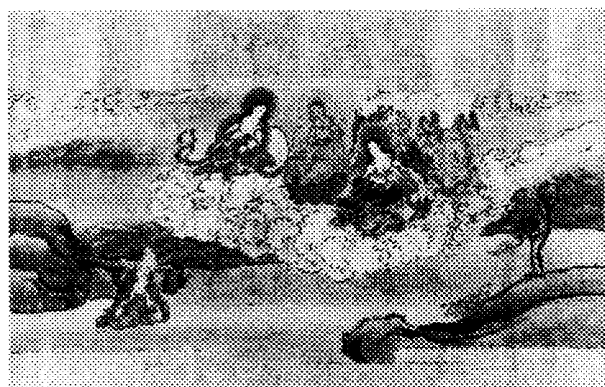
大英博物館所蔵「ゑんの行者」絵巻について



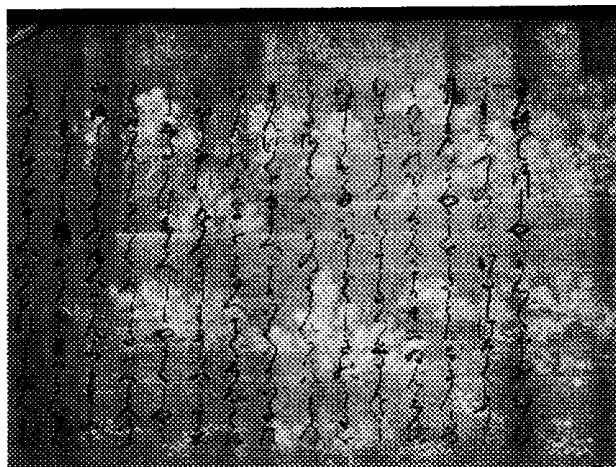
〔画下6：日天子に祈り、天竺の魔王  
と戦う行者〕【画16】



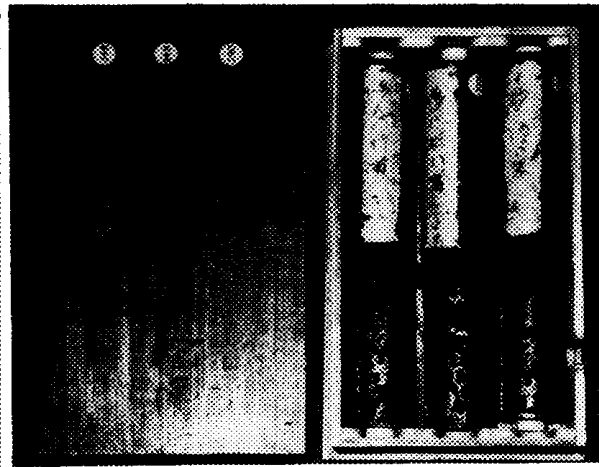
〔画下3：母と月若〕【画15】



〔画下7：生身の釈尊を拝す行者〕  
【画17】



詞書と料紙下絵



箱の蓋表書と絵巻三卷

原文（翻刻）

○上巻

〔詞上〕

① ますあさひまるハ今は御出家ならせ給  
えんのしやうかくとそ申けるいしをたゝ  
みてしとねとし岩をかさねてほらとな  
しなんきやうくきやうのこうつもり  
今ハはやつうりきしさいの御身となら  
せ給ひけるもとよりしん山ゆうこくなれ  
はしゝくまこらうやかんそのほかのけた  
ものまで入かハリ立かハリきやうしやをし  
ゆこしたてまつるあるときしやうかく御  
心におほしめしけるハわれ一たひ人けんに  
むまれ三世のゐんくわをさとり仏しやうに  
入と申せともしよくあくの人けん心すな  
ほにちゑたけたるものハをしへすして後  
世をいとなむ又せんにもよらすあくにも  
おちすちゑもなくひかめる事もなくちう  
しやくの人けんハすゝむるになくたかひ

翻案

(1) ます朝日丸は、今は御出家成らせ給ひ、  
役の小角とぞ申しける。石を疊  
みて褥とし、岩を重ねて洞とな  
し、難行苦行の功積もり、  
今ははや、通力自在の御身となら  
せ給ひける。もとより深山幽谷なれ  
ば、獅子、熊、虎狼、野干、その他の獣  
まで、入れ替り立ち替り行者を守  
護し奉る。ある時、小角御  
心に思し召しけるは、我一度人間に  
生まれ、三世の因果を悟り、仏性に  
入ると申せども、俗悪の人間、心素直  
に智恵長けたる者は、教へずして後  
世を営む。又善にも依らず、悪にも  
堕ちず、智恵もなく、僻める事もなく、柔  
弱の人間は、勧むるになくたがひ

てあくをもせんにひるかへす只とにかく  
につたなきハ心かうにいのちをおします  
ちから人にすぐれ身にほこり佛ほうを  
もうやまハすあるひハかうかにすな取」

〔画上1…朝日丸と両親〕【画1左】

〔詞上2〕

②さるあひたこゝに人皇四十二代のみ  
かともんむてんわうの御在位の御時  
やまとのくにかつらきのこほりかもえき  
氏のはつりうわうしを出てとをからす  
権の右大弁きやうふのせうとみかた  
とてゆミ取一人おハしますそのこゝろゆ  
たかにしてとくたかく家さかへその名  
も高き名将なり御子一人おハします  
御名をハあさ日まるとて今年十三に  
なり給ふそうめいえいちにして一字を  
きひてハ百字にさと御さいかくゆう  
ちやうにして心にしひふかくうちにハ五  
かいをたもちほかにハ五常をまもり  
ふんせんわうのいにしへをきくにそとう  
をつらねしんたいれいしやうをまうけし」

て悪をも善に翻す、ただとにかく  
に拙きは、心孝に命を惜します、  
力人に優れ身に誇り、仏法を  
も敬はず、あるひは江河に漁り、」

(1)さる間、此処に人皇四十二代の帝

文武天皇の御在位の御時、

大和の国葛城の郡、賀茂役

氏の末流王氏を出でて遠からず、

権の右大弁刑部少輔とみかた

とて弓取一人おはします。その心豊

かにして、徳高く、家栄え、その名

も高き名将なり。御子一人おはします。

御名をば朝日丸とて、今年十三に

成り給ふ。聡明英知にして、一字を

聞いては百字に悟り、御才覚悠

長にして、心に慈悲深く、内には五

戒の保ち、外には五常を守り、

文宣王(孔子)の古を聞くに、俎豆

を陳ね、進退礼讓(礼容カ)を設けし」

③もこれにハ過しと見え給ふ父母のてう  
あひかきりなしさて又家のかうけん  
にとよらの八郎ためつきとてちからハ  
人にすくれちゑふかくころかうなれは  
かミをうやまひ下をなていゑをお  
さめたてまつれハとみかたの御ゐせい申  
はかりハなかりけり」

〔画上2…門前の従者〕【画1右】

〔詞上3〕

④生すときくしやはハわつかのあひたなり  
来世ハなかきすみかとときくみしかき今  
世をすてかねてなかきらいせをそむ  
かん事もつてのほかのひかことなりたゝ  
御いとまとそ仰ける母うへきこしめされ  
おとこか申もことハリなれとも父母のめ  
いにそむく事一方ならぬひかことなり  
五きやくさいの身とならハ三世のしよ  
ふつ一さいのほさつもいかてかかんおう  
あるへきそ後世の事をおもひてもよ  
にあるちゝ母になけきをかくるものな  
らはのちの世とてもおほつかなし

(2)も、これには過ぎしと見え給ふ。父母の情  
合ひ限りなし。さて又、家の後見  
に豊浦の八郎ためつき（為次）とて、力は  
人に優れ、智恵深く、心孝なれば、  
上を敬い下を撫で、家を治  
め奉れば、とみかたの御威勢申す  
ばかりはなかりけり。」

(4)（前欠\*③）生ずと聞く。娑婆は僅かの間なり。

来世は永き住処と聞く。短き今  
世を捨てかねて、永き来世を背  
かん事を、以ての外の僻事なり。ただ  
御暇とぞ仰せける。母上聞こし召され、  
男が申すも理なれども、父母の命  
に背く事、一方ならぬ僻事なり。  
五逆罪の身とならば、三世の諸  
仏一切の菩薩もいかでか感応  
あるべきぞ。後世の事を思ひても、世  
にある父母に嘆きを掛くるものな  
らば、後の世とても覺束なし、

たゝおもひとゝまり候へと

いたきついてそなき給ふ」

【画上3：朝日丸飛雲に乗って父母との別れ】【画2】

【詞上4】

⑤わか君かさねての給ふハそれしやくそん  
ハてんちくのあるししやうほんわうの御子  
なれともしゆしやうさいとのその御た  
めにわう位をすてゝたんとくせんに  
入給ふさてこそまつ世の今までも仏  
ほうせかいにさかなりこれかうゝとや  
いはん又ふかうとや申へきゐんくハのめ  
くるところ人りにをよひかたしあす  
をもしらぬ露の身のもしもむなしくなる  
ならはいかにとゝめ給ふともめいとのか  
ひハよもまたし生てこの世にあるならハ  
おりゝまいり申へしそのうへ我つね  
ゝの大くハんにハよし野のさわうこんけ  
むにきせいをかけはゝうへのたい内に  
男子を得させて給はれといのりしかいの  
候て今七月の御身なりかやうのことを  
ハ母うへしろしめさるましこの子むま

ただ思ひ止まり候へと、

抱きついてぞ泣き給ふ。」

(5)若君重ねて宣ふは、それ釈尊  
は、天竺の主浄飯王の御子  
なれども、衆生済度のその御為  
に、王位を捨てて檀特山に  
入り給ふ。さてこそ末世の今までも、仏  
法世界に盛んなり。これ孝行とや  
云はん、又不孝とや申すべき。因果の巡  
る所、人力に及び難し。明日  
をもしらぬ露の身のもしも空しくなる  
ならば、いかに止め給ふとも、冥土の使  
はよも待たじ。生きてこの世にあるならば、  
折々参り申すべし。その上、我常  
常の大願には、吉野の蔵王権現  
に祈誓を掛け、母上の胎内に  
男子を得させて給はれと、祈りし甲斐の  
候ひて、今七月の御身なり。斯様の事を  
ば、母上知ろし召さるまじ。この子生ま

れて候ハ、家をつかせ給ふへしいまは  
何をかつゝミ申へきわれハくわかせう」

⑥ふつのけしんなるか日ほんにふつほう

こしのためかりに御たいないをかりしなり  
今ハとゝめ給ふともかなひかたしとてこく  
うにゆひさし給へハ白雲一むらまひさかり  
わか宮にうちのかつらき山へそいり給ふ  
父母おとろきこれハ／＼との給ひてあ  
とをしたひたまへともその行かたは  
なかりけり」

〔画上4…父病に臥し、母の嘆き〕【画3】

〔詞上5〕

⑦ふうふもろともそのまゝそこにたふれふ

ししハしきえ入給ひけりやゝありてと  
みかた殿おつるなミたのひまよりもさて  
ハわか子ハほとけなり人けんのおさまし  
さハとゝめけるこそをろかなれこのうへハわれ  
／＼ふうふもこのちこのくりきにてと  
そつ天にむまれんと御手を合せ給へ  
ともさすか別れのかなしさに又さめ／＼  
となき給ふさてあるへきにあらされは

れて候らはば、家を継がせ給ふべし。今は  
何をか包み申すべき。我は過去迦葉」

(6)仏の化身なるが、日本に仏法

護持の為、仮に御胎内を借りしなり。

今は止め給ふとも叶ひ難しとて、虚空

に指差し給へば、白雲一叢舞ひ下がり、

若宮に打ち乗り、葛城山へぞ入り給ふ。

父母驚き、これはこれとは宣ひて、跡  
を慕ひ給へども、その行方は

なかりけり。」

(7)夫婦諸共そのままそこに倒れ臥

し、暫し消え入り給ひけり。ややありてと

みかた殿落つる涙の隙よりも、さて

は我が子は仏なり。人間の浅まし

さは止めけるこそ愚かなれ。この上は、我

我夫婦も、この稚児の功力にて、兜

率天に生まれんと、御手を合はせ給へ

ども、さすが別れの悲しさに、又さめざめ  
と泣き給ふ。さて、あるべきにあらざれば、



かくて月日をくらせ給ひけるされとも  
わか君の御ことをわすれさせ給ハすある  
ときとみかた殿れいならずやまふのゆか  
にふし給ふ御たいところ立より給ひて  
御こゝろハ何と候そや朝日か事をさのミ  
なけかせ給ハて御こゝろをなくさみわかゝ  
たよりをまち給へそのうへわらハもたゝ  
ならぬ身にてありあらうらめしの御ふせ  
いやとくときなけかせ給ひけるいたハしや  
とみかた殿やうく御くしあけ給ひわれは」

⑧ なき人の御ためなりとふかくせいし申  
せハミたいたうりにつめられなミたとゝ  
もにありしところに入給ふさてためつき  
ハとみかたの御しかいをのへにをくり一へん  
のけふりとなし御そよくやうしよきに  
とふらひたてまつるとにもかくにもみたい  
ところの心のうちあハれとも中く  
申はかりハなかりけり」

〔画上5…とみかた殿の供養〕【画4】

〔詞上6〕

⑨ さるほとになけきの中のことなれともみ

かくて月日を送らせ給ひける。されども  
若君の御事を忘れさせ給はず。ある  
時、とみかた殿例ならず病ふの牀  
に臥し給ふ。御台所立ち寄り給ひて、  
御心は何と候ふぞや、朝日が事をさのみ  
嘆かせ給はで、御心を慰み、若が  
便りを待ち給へ。その上、妾もただ  
ならぬ身にてあり。あら恨めしの御風情  
やと口説き嘆かせ給ひける。労はしや、  
とみかた殿やうやう御髪上げ給ひ、我は」

(9) 亡き人の御為なりと、深く制し申  
せば、御台道理に詰められ、涙とと  
もにありし所に入り給ふ。さてためつき  
はとみかたの御死骸を野辺に送り、一片  
の煙となし、御僧供養し、善きに  
弔ひ奉る。とにもかくにも御台  
所の心の内哀れとも、中々  
申すばかりはなかりけり。」

(10) さる程に、嘆きの中の事なれども、御

たいところハ御さんのひもととき給ふとり  
あけてみ給へハ玉のやうなるわか君にて  
そおハします母うへつく／＼と御らんして  
かほのかゝりハそのまゝめいと御ちゝに  
にたるそやあハれたゝもろともに見ると  
たにおもひなはいかハかりうれしかるへきに  
うつりかハる世の中にひよくの鳥の中たえ  
てひとりこかれてみるならハ父のかたみと  
いひなからはゝかためにハ思ひのたねを  
まきをかせ給ふそよゆめになりともとみ  
かたとのこれハわかゝとの給へかしとまたへ  
こかれ給ひける明ぬ暮ぬとすきのまと  
月日の立にしたかひてちゝとみかたの御  
すかたまなこのうちのかしこさハあにの  
あさひまるのおもかけあけてなにせん  
玉手はこ二見にかけたるかたみこのわ  
かゝ事なりとて月日ををくらせ給ひけ  
るこれハさてをきかつらき山にをハし」  
⑩あるひハ山こくにけものをかり人のいの  
ちを取事をちんかいとも思ハすわかまゝ  
をふるまふくせもの世中にみち／＼て

台所は御産の紐を解き給ふ。取り  
上げて見給へば、玉の様なる若君にて  
ぞおはします。母上つくづくと御覧じて、  
顔の懸かりはそのまま冥土の御父に  
似たるぞや。哀れただ諸共に見ると  
だに思ひなば、如何ばかり嬉しかるべきに、  
移り変る世の中に、比翼の鳥の中絶え  
て、独り焦がれて見るならば、父の形見と  
云ひながら、母が為には思ひの種を  
蒔き置かせ給ふぞよ。夢になりともとみ  
かた殿、これは若かと宣へかしと、悶へ  
焦がれ給ひける。明けぬ暮れぬと過ぎの間と、  
月日の立つに従ひて、父とみかたの御  
姿、眼の内の賢さは、兄の  
朝日丸の面影、開けて何せん  
玉手箱、二見に掛けたる形見、この若  
が事なりとて、月日を送らせ給ひけ  
る。これはさて置き、葛城山におはし」  
⑫あるひは山谷に獣を狩り、人の命  
を取る事を塵芥とも思はず、我が儘  
を振る舞ふ曲者、世の中に満ち満ちて、

法をすゝむれとも経をもつていさめて  
もせんかたもなきもの共をいかにもして  
佛かいにすゝめいれんとおほしめしその  
ことゝなくつれく里へいて給ふ」

〔画上6：洞を住处とする行者と守護する獣〕【画5】

〔詞上7〕

- ⑪あるときしやうかくふしせんけんを心か  
けもとよりひ行しさいにてやはんにかつ  
らき山をいて給ひせつなのあひたに  
さよの中山とをらるゝこゝにはんとう  
かたに名を得たるくせもの共山中にかく  
れるてわうらいの旅人をまつところ  
にかのきやうしやをミたてまつりなに  
ものなれハ夜中にこの山をとるハふ  
しんなりそれあますなといふまゝにまん  
中にとりこむる行者少しもさハき給ハ  
すさらぬていにてとをらるゝとうそく共  
みるよりもそれにかすなとよははりう」  
⑫しいけるものをとりくらふ事かそへかた  
しされともわかほうりきにてかれを  
なためまいねんゑしきをあたふるなり

法を勧むれども、経をもって諫めて  
も、詮方もなき者共を、いかにもして  
仏界に勧め入れんと思し召し、その  
事となく、つれづれ里へ出で給ふ。」

(13)ある時小角、富士浅間を心懸

け、もとより飛行自在にて、夜半に葛

城山を出で給ひ、刹那の間に

小夜の中山通らるる。ここに板東

方に名を得たる曲者共、山中に隠

れ居て、往來の旅人を待つ所

に、彼の行者を見奉り、何

者なれば、夜中にこの山を通るは不

審なり、それ余すなと云ふまゝに、真ん

中に取り込むる。行者少しも騒ぎ給は

ず。さらぬ体にて通らるる。盜賊共

見るよりも、それ逃がすなと呼ばはり、う（中欠\*14）」

(15)し、生ける物を取り食らふ事、数え難

し。されども我が法力にて彼を

宥め、毎年餌食を与ふるなり。

これを名つけて大ミねとかうしてみね  
いりをはしめたり今よりしてハなんちら  
もしやうかくかすかたをまなひまい年  
ミねに入きしんにえしきをあたふへし  
そのうへミねへ入事ハしんりきにてハ  
かなハぬなりほうりきなくしてハなりか  
たし千ちやうのたにゝとひはんしや  
くの岩をわたるきやうほうすなほに  
なき人ハかならずいのちをうしなふなり  
なんちらもあひかまへてわかおきてを  
そむくへからすさあらはなんちらをうち  
つれ峯いりせんと給ひてしやうそ  
くあらためはやみねいりとそ

きこえける」

〔画上7：行者に打ちかかる盗賊〕【画6】

○中巻

〔詞中1〕

⑬されは行しやハめんく／＼に打むかひ  
それ山ふしの行ハかたしけなくもふとう  
明王のきやうをかたとりときんといつ

これを名付けて大峯と号して、峯  
入を始めた。今よりしては汝等  
も小角が姿を学び、毎年  
峯に入り、鬼神に餌食を与ふべし。  
その上峯へ入る事は、人力にては  
叶はぬなり。法力なくしては成り難  
し。千丈の谷に飛び、磐石  
の岩を渡る行法、素直に  
なき人は、必ず命を失ふなり。  
汝等も相構へて、我が掟を  
背くべからず。さあらば、汝等を打ち  
連れ峯入せんと宣ひて、装束  
改め、はや峯入とぞ

聞こえける。」

(16)されば行者は面々に打ち向かひ、  
それ山伏の行は、忝くも不動  
明王の形を象り、頭襟と云つ

は五ちのほうくはんなり十二ゑんえんの  
ひたをすへていたゝきくゑまんだら  
のすゝかけたいさうこくしきのはゝきを  
はきさて又八めのわらんちハハようの  
れんけをふまへたりいていいるいきは  
阿うんの二字をとなへそくしんそく仏  
のほうなれハをろそかに思ふへからす我  
にしたかひ来るへしとやかてしやう  
かくせんたちにてかつらき山へと入給ふ  
山路にいりてみ給へハかん上に雲しやう  
しれいとうに風おこる下れハはんちん  
きつさきをならへのほれハたんかんきも

〔画中1…熊野権現の出現〕【図7】

〔詞中2〕

⑭かゝるところにおんかく天にみちゆや  
こんけんハあまたのけんそくもろとも  
に御むかひにいて給ふたかひにしき  
たいありて神はあからせ給ひける  
そのゝちきやうしやハ山ふしたちに  
うちむかひこれよりめんくは谷くへ  
かへり此ほうをひろめ来年のこのころハ

ぱ五智の宝冠なり、十二因縁の  
襷をすゑて頂き、九会曼荼羅  
の鈴懸、胎藏黒色の脛巾を  
穿き、さて又八目の草鞋は八葉の  
蓮華を踏まへたり。出で入る息は  
阿吽の二字を唱へ、即身即仏  
の法なれば、疎かに思ふべからず。我  
に従ひ来たるべしと。やがて小  
角、先達にて葛城山へと入り給ふ。  
山路に入りて見給へば、岩上に雲生  
じ、嶺頭に風起こる。下れば万尋  
切っ先を並べ、上れば断岸肝（中欠\*（17））

（19）かかる所に音楽天に満ち、熊野  
権現は数多の眷属諸共  
に御迎ひに出で給ふ。互ひに色  
代ありて、神は上がらせ給ひける。  
その後、行者は山伏達に  
打ち向かひ、これより面々は谷々へ  
帰り、この法を弘め、来年のこの頃は

又かつらきへ来るへしはや／＼いとま  
をえさするなりとの給へハをの／＼かし  
こまつてをのかくに／＼へそかへりける  
さてきやうしやハあんしつに入給ふとに  
もきやうほうたつせしきやうしやとて  
みなかんせぬものこそなかりけれさる  
あひたあるとき行しやハかつらきの岑  
よりきんふ山へおもむき給ふかまことに  
けハしくみちたえて人けんさらにかよひ  
かたくそ見えにけるきやうしや心におほし  
めさるゝハまつ世のきとくにこのミねへ  
岩はしをわたさはやとおほしめしあ」

⑮ たりちかき山神たちをめされける神たち  
をの／＼いて給ふきやうしや御らんしい  
かにをの／＼きんふせんよりこのミねへ  
こくうにはしをわたして給はるへしいかに  
／＼と仰ける神たちきこしめしうけ給  
はるとの給ひてやかてはしをかけらるゝ  
こゝにかつらきの明神をハ一ことぬしの  
御神とて女たひにてましますか御かた  
ち見にくきゆへ人のミるめをはち給ひ

又葛城へ来たるべし。はやはや暇  
を得さするなりと宣へば、各々畏  
まって、己が国々へぞ帰りける。  
さて行者は庵室に入り給ふ。とに  
も行法達せし行者とて、

皆感ぜぬ者こそなかりけれ。さる  
間、ある時行者は葛城の岑

より金峯山へ赴き給ふが、まことに  
険しく、道絶えて、人間更に通ひ  
難くぞ見えにける。行者心に思し  
召さるるは、末世の奇特に、この岑へ  
岩橋を渡さばやと思し召し、あ」

⑯ たり近き山神達を召されける。神達  
各々出で給ふ。行者御覧じ、如  
何に各々、金峯山よりこの岑へ  
虚空に橋を渡して給はるべし、如何に  
如何にと仰せける。神達聞こし召し、承  
ると宣ひて、やがて橋を架けらるる。  
ここに葛城の明神をば一言主の  
御神とて女体にて坐しますが、御形  
醜き故、人の見る目を恥ぢ給ひ、

ひるハさらにいて給ハすよな／＼はしを  
わたさるゝさるほとに行しや立いて給  
ひ岩はしを御らんしていそきしよ神を  
めされ何とてめん／＼ハはしをゝそくかけ  
給ふそいかに／＼といからるゝ神たち  
きゝ給ひさん候かつらきのひとことぬし  
かたちをはち給ひてよるならて出給ハす  
それゆへ岩ハししやうしゆつかまつらす  
いかゝせんと仰けるきやうしや大きにい  
そき一ことぬしをめされいかにひとこと  
ぬしさしもちかひしかひもなく御身おこ」

【画中2：行者、葛城山より金峯山に岩橋を架けんとす】

【画8】

【詞中3】

①⑥ いたハしやひことぬしハ神なりとハ申せ  
ともふつりにハかなハねは行しやの  
ほうはくにいましめられなミたにくれて  
ましますか心におほしめさるゝハ此うへハ  
まつしやのしんをミやこへのほし文武  
帝にさんけんしてきやうしやをえん  
とうへなかしをきこのくるしミをのかれはや  
とおほしめしやしろのかたへうちむかひ

昼は更に出で給はず、夜な夜な橋を  
渡さるる。さる程に行者立ち出で給  
ひ、岩橋を御覧じて、急ぎ諸神を  
召され、何とて面々は橋を遅く架け  
給ふぞ、如何に如何にと怒らるる。神達  
聞き給ひ、さん候、葛城の一言主  
形を恥ぢ給ひて、夜ならで出で給はず。  
それ故、岩橋成就仕らず。

如何がせんと仰せける。行者大きに、急

ぎ一言主を召され、如何に一言

主、さしも誓ひし甲斐もなく、御身おこ（後欠\*②①）」

②② 芳はしや、一言主は神なりとは申せ

ども、仏力には叶はねば、行者の

法縛に戒められ、涙に暮れて

ましますが、心に思し召さるるは、この上は

末社の神を都へ上し、文武

帝に讒言して、行者を遠

島へ流し置き、この苦しみを逃ればや

と思し召し、社の方へ打ち向かひ、

まつしやのしんとそめされけるまつしやのしんまいりこのよしを見まいらせ大きにおとろきいそきなわをとかんとす明神御らんしあらをろかなるまつしやのしんふつりきなれハかなハぬそやなんちハみやこへのほりかやう／＼と仰けるまつしやの神うけ給ハリかしこまつて候と御まへをまかりたちやかてしや人のすかたに身をへんしいそきさんたいつかまつりそも／＼かつらき山に住ゐつかまつるえんのしやうかくこそふつほうにこと」

①⑦よせてあくきやく人をまねきよせ山中にかくしをきわう位をもおそれす神しや佛かくこと／＼くうちやふりあまつさへかつらきの明神にさま／＼のあたをつかまつるこの事御ゆたんましまさはてうかの御大しにて候と申すてゝそかへりける公家大臣大きにおとろきやかてそうもん申さるゝみかとけきりんあつてそのきならはいそきしやうかくをめしとりえんとうへなかしをけと

末社の神とぞ召されける。末社の神参り、この由を見まいらせ、大きに驚き、急ぎ縄を解かんとす。明神御覽じ、あら愚かなる末社の神、仏力なれば叶はぬぞや。汝は都へ上り、斯様と仰せける。末社の神承り、畏まつて候と御前を罷り立ち、やがて社人の姿に身を変じ、急ぎ参内仕り、そもそも葛城山に住ま居仕る役の小角こそ仏法に事」

②③寄せて、悪逆人を招き寄せ、山中に隠し置き、王位をも恐れず、神社仏閣悉く打ち破り、剩へ葛城の明神に様々の仇を仕る。この事御油断ましまさば、朝家の御大事にて候と申し捨ててぞ帰りける。公家大臣大きに驚き、やがて奏聞申さる。帝逆鱗あつて、その儀ならば、急ぎ小角を召し捕り遠島へ流し置けと



のせんしにて

ときのさふらひところ

けんひいしの別たうに

仰せつけらる」

〔画中3：葛城山の末社の神、一言主の命にて、行者の事を朝廷に訴える〕【画9】

〔詞中4〕

⑮かしこまつて候と御まへをたち大せい

引くしかつらき山にわけいり行しや

のいはやをおつとりまハし時のこゑ

をそあけにけるきやうしやこのよし

御らんしなにもものなれハ此山へあんな

いなしに立いる事きつくわいなりと

仰せけるくハんくんきひていかにしや

うかく此あひたていとをかたふけんと

たくみし事宮こへきこえちよくし是

まできたるなりいそき宮こへのほり

しさいを申せとのゝしりけるきやうしや

きこしめしさてハ一言ぬしかさんけん

なりとおほしめしいかになんちらくさ

も木もわか大君のくになれハたとへ

しゆつけの身なりとてもいかてとかう

の宣旨にて、

時の侍所

検非違使の別当に

仰せつけらる。」

⑯畏まつて候と御前を立ち、大勢

引き具し葛城山に分け入り、行者

の窟を押っ取り廻し、関の声

をぞ揚げにける。行者、この由

御覧じ、何者なればこの山へ、案

内なしに立ち入る事、奇怪なりと

仰せける。官軍聞ひて、如何に小

角、この間帝都を傾けんと

巧みし事、都へ聞こえ、勅使これ

まで来たるなり、急ぎ都へ上り

子細を申せと罵りける。行者

聞こし召し、さては一言主が讒言

なりと思し召し、如何に汝等、草

も木も我が大君の国なれば、譬へ

出家の身なりとても、如何でとかう

(王法カ)

ハそむくへきさりながらこれハまさしき  
一ことぬしかさんけんなりせひをあや  
まりてこうくわいすなと仰ける官くん  
とも聞てもものないハせそひつたてよと」

①9 われも／＼とをしよするかゝるところに  
山中しんとうらいてんする事おひ

たゝしく五きせんきあらハれいて岩  
かんせきをふらしこくうにひきやうし  
たりけるよせ手のくはんくんみちんのこ  
とくうちくたかれたま／＼のこるもの共  
ハふるひわなゝくはかりなりそのとき  
きやうしや五きせんきをめされわれ  
わうとにすみなからむやくのわさハひ  
ハひか事也まつしりそひてかさねて  
しさいをそうもんすへしなんちらも引  
さりてしせつをまてとそおほせける  
をの／＼仰にしたかひ立さりける」

〔画中4…官軍、行者に打ちかかる〕【画10右】

〔詞中5〕

②0 さてきやうしやハ白雲にうちのり  
ふし山を心かけこくうにとはせ給ひける

は背くべき。さりながら、これはまさしき  
一言主が讒言なり。是非を誤

りて後悔すなと仰せける。官軍

共聞て、あものな云はせぞ、引つ立てよと」

(25) 我も我もと押し寄する。かかる所に、

山中震動雷電する事夥

しく、後鬼前鬼現はれ出で、岩、

岩石を降らし、虚空に飛行し

たりける。寄せ手の官軍、微塵の如

く打ち碎かれ、たまたま残る者共

は震ひ慄くばかりなり。その時

行者、後鬼前鬼を召され、我

王土に住みながら、無益の災

は僻事なり。先づ退いて、重ねて

子細を奏聞すべし。汝等も引き

去りて、時節を待てとぞ仰せける。

各々仰せに従ひ立ち去りける。」

(26) さて行者は白雲に打ち乗り、

富士山を心懸け、虚空に飛ばせ給ひける。

これハさてをき官くんハほうくミヤこへ  
にけのほりかやうのしたいをそうもんす  
みかといよくけきりんあつてそのきな  
らはしやうかくか母とおとうとをめし取  
てつよくいましめをくへしさあらハしやう  
かくも出へしはやくとのせんしなりたか  
まの中将一千よきを引くしかつらきの

こほりにをしよせ二重三重にとりま

ハし時のこゑをそあけにけるしやうの内

にハ思ひよらさることなれハうへを下へと

もてかへすされともためつき大手のや

くらにあかりなにもなれハラうせきよ

名のれきかんと申けるよせ手の大将た

かまの中将一ちんにこまかけよせえんの

しやうかくむほんゆへはとおとうとの月

わかとの御むかひにたかまの中将せん

しをかうふりてまいりたりいかにくと

〔画中5…行者、官軍の攻めを、鬼神を使い防ぐ〕〔画10左〕

〔詞中6〕

②1ミヤこへのほりことのしさいをうかふ

へしなんち八月わかをともしなひうし

これはさて置き、官軍はほうほう都へ  
逃げ上り、斯様の次第を奏聞す。

帝いよいよ逆鱗あつて、その儀な

らば、小角が母と弟とを召し捕り

て、強く戒め置くべし。さあらば小

角も出づべし。はやはやとの宣旨なり。高

天の中将、一千余騎を引き具し葛城の

郡に押し寄せ、二重三重に取り廻

し、鬨の声をぞ揚げにける。城の内

には思ひよらざる事なれば、上を下へと

もて返す。されどもためつき大手の矢

倉に上がり、何者なれば狼藉よ、

名乗れ聞かんと申ける。寄せ手の大将高

天の中将一陣に駒駆け寄せ、役の

小角謀叛故、母、弟の月

若殿の御迎ひに、高天の中将宣

旨を被りて参りたり。如何に如何にと（中欠\*②7）

②8都へ上り、事の子細を窺ふ

べし。汝は月若を伴ひ、後

ろの山よりおちゆきてしせつをま  
てとおほせけるためつきうけ給はり  
かしこまつて候といそきやくらにあかり  
いかによせ手の人く月わかたゝ今  
御しかいあるあひたそれかしも御とも申  
なりといふまゝにやくらに火をかけけふ  
りのまきれに若君の御とも申うし  
ろの山へそおちにけるはうへハしかいせん  
とし給ふところをよせておりあハせ  
やかていけとりろうこしにのせ申ミや  
こをさしてそのほりける

とにもかくにもはうへの心のうち

なにゝたとへんかたもなし」

〔画中6…官軍、行者の母と弟の邸を攻める〕【画11】

〔詞中7〕

②ちやうこうきハマりてたゝ今むなしく  
なるとおほえたりわれともかくもなるなら  
はたいたないのみとり子か生れて男子  
ならハ家をつかせ給ふへしあらなつかし  
の朝日まるやとこれをさいこのことは  
にてむなしく成給ふ御たいゆめともわ

ろの山より落ち行きて、時節を待  
てと仰せける。ためつき承り  
畏まつて候と、急ぎ矢倉に上がり、  
如何に寄せ手の人々、月若ただ今  
御自害ある間、某も御供申す  
なりと云ふまゝに、矢倉に火を掛け、煙  
の粉れに、若君の御供申し、後  
ろの山へぞ落ちにける。母上は自害せん  
とし給ふ所を、寄せ手居り合はせ、  
やがて生け捕り、籠輿に乗せ申し、都  
を指してぞ上りける。

とにもかくにも母上の心の内、

何に譬へんかたもなし。」

(8)定業極まりて、ただ今空しく  
なると覺えたり。我ともかくもなるなら  
ば、胎内の嬰兒が生れて、男子  
ならば家を継がせ給ふべし。あら懐かし  
の朝日丸やと、これを最期の言葉  
にて空しく成り給ふ。御台、夢とも弁

○下巻

【詞下】

きまへ給ハすなみたなからいたきつき是ハ  
く／＼とハかりなりおつるなミたのひまより  
もくとき事こそあハれなれうらめしのわか  
身やなあさひまるにハむまれてわかれ  
きえもやられぬ思ひのうちに二世と契し  
その人にわかれてあとにあるへきかゆかて  
かなハぬみちならハわらハもつれて行た  
まへとまもりかたなをひんぬひてすて  
にしかいとみえ給ふためつきあハてゝをし  
とゝめこハふかくなる御ふせいそれゆミ取  
のさいちよとしてさやうに心よハくてかな  
ふまし御さんならせ給ひてわか君にて  
ましまさハとみかた殿の御ミやうしをつかせ  
給ひ行すゑなかく御とふらひあらんこそ」  
②③こえていよ／＼深山にわけ入それより  
も大ミねかつらきところ／＼のをこなひ  
過てそれよりくま野へそ

いて給ふ」

へ給はず、涙ながら抱きつき、これは  
これはとばかりなり。落つる涙の隙より  
も、口説き事こそ哀れなれ。恨めしの我が  
身やな。朝日丸には生まれて別れ、  
消えもやられぬ思ひの中に、二世と契りし  
その人に、別れて跡にあるべきか、行かで  
叶はぬ道ならば、妾も連れて行き給  
へと護刀を引ん抜いて、すで  
に自害と見え給ふ。ためつき慌てて押し  
止め、こは不覚なる御風情、それ弓取  
の妻女として、左様に心弱くて叶  
ふまじ。御産ならせ給ひて、若君にて  
ましまさば、とみかた殿の御名字を継がせ  
給ひ、行末永く御弔ひあらんこそ、」  
(18)越えて、いよいよ深山に分け入り、それより  
も大峯、葛城、所々の行なひ  
過て、それより熊野へぞ

出で給ふ。」

②4 われゆへとかなき給ふは、うへやおと

うとまでうきめにあはせ申事さこそ

うらみにおほすらん何ほとのことあるへき

ろうをけやふりは、をうはひとらんハ

いとやすしかれともこゝになんきあり

それ天地のおんふかのおん父母のおん

中にもおもきハ國王のおんなりそれを

そむきてハ出家をとけかたししよせん

我ミやこへいては、をたすけはやとおほ

しめしせつなかあひたにみやこにの

ほりはハえんのしやうかくと申ものにて

候なりゆへなきさんにしつまんことのくち

おしさに身をさつて一度もとかなき母

をきんこくせられ候也此うへハそれかしを

ともかくもはからハれは、をゆるし給ふへし

とのたまへハ番のものいそきそうもん

申けるみかといらんあつてそれしらすに

めせかしこまつて候とやかてしやうかくを

引はり左右の手をとらへしらすにとつて

ひつすゆる」

【画下1…行者、帝に無実の讒を訴え、白洲に据えらるる】

【画12】

(30) (前欠\*29) 我故、咎なき給ふ母上や弟

まで憂き目に遇はせ申す事、さこそ

恨みに思すらん。何程の事あるべき、

籠を蹴破り、母を奪ひ取らんは

いと易し。しかれども、ここに難儀あり。

それ天地の恩、ふかの恩、父母の恩、

中にも重きは国王の恩なり。それを

背きては出家を遂げ難し。所詮

我都へ出で、母を助けばやと思

し召し、刹那が間に都に上

り、これは役の小角と申す者にて

候なり。故なき讒に沈まん事の口

惜しさに、身を去って、一度も咎なき母

を禁獄せられ候なり。この上は、某を

ともかくも計らはれ、母を許し給ふべし

と宣へば、番の者急ぎ奏聞

申しける。帝覧覧あつて、それ白洲に

召せ、畏まつて候と、やがて小角を

引っ張り、左右の手を捕らへ、白洲に取って

引っ据ゆる。」

〔詞下2〕

②⑤時の上けい立出ていかにしやうかく

なんちハ何とてすちなきむほんをた

くミけるそもとより一ミのものあらは

一々白しやう申へしいかに／＼と仰ける

きやうしやきこしめしこハおもひもよら

さる御たつねかなえきかううちの家と

して君の御おんをかうふりし身に

おるてのそミなししかれともようせう

のむかしよりしゆつけののそミあるに

よりしよりやうさいほううちすていと

をしミふかきちゝはゝにさへたちわかれ

えとをいとふほとんしやもんかなにの

のそミの候て國家をかたふけ申へきもと

より仏ほう王ほうのさかへさせ給はんを

こそいのる仏ほうなれわれ毎年にミね

にいりところ／＼のさいれいたに／＼の

御きたうもまつたく我ためならずこく

とあんせん長久ならしめんためいつくか

わうちにあらすといふ事なしさりながら」

②⑥ひとへにこれハむしつの人に候へ

(31)時の上卿立ち出でて、如何に小角、

汝は何とて筋なき謀叛を巧

みけるぞ。もとより一味の者あらば、

一々白状申すべし。如何に如何にと仰せける。

行者聞こし召し、こは思ひもよら

ざる御尋ねかな。役公氏の家と

して、君の御恩を被りし身に

おいて望みなし。しかれども幼少

の昔より、出家の望みあるに

より、所領財宝打ち捨て、いと

をしみ深き父母にさへ立ち別れ、

穢土を厭ふ程の沙門が、何の

望みの候ひて國家を傾け申すべき。もと

より仏法、王法の栄えさせ給はんを

こそ祈る仏法なれ。我毎年に峯

に入り、所々の祭礼、谷々の

御祈禱も全く我が為ならず、国

土安全長久成らしめん為、何処か

王地にあらすと云ふ事なし。さりながら、」

(32)偏にこれは無実の讒にて候へ

ともしゐて申せハ天かんくらきにさも  
 にたりたとへ身をくたかるゝともこくと  
 の中に住ものかなにしに君をかすめ  
 たてまつるへきわれさいわひ神つうを  
 得て候へハらうをけやふり母をうはひ  
 とりひ行しさいにいつくへゆかんもや  
 すけれども我大くはんをおこし人をけと  
 するその身なれハこくほういかてそむ  
 くへきわれあやまつてくにのほうをや  
 ふりなハなかきしうしのあやまりなり  
 さて又いちみ同心と申事もとより出  
 里の我なれハ家をいつるともからをいち  
 みと仰候ハ、日本國のそう法師一人も  
 もるゝもの候ましこのうへハ申上へき事  
 なしとさもすゝしくその給ひけるさし  
 あたりたる道理なれハ君をはしめたて  
 まつり一座のくきやう大臣あつはれ有  
 かたきしやもんかなとかんせぬ人ハなかりけり  
 内よりのせんしにハまつゝことのしつふを」

【画下2…行者、伊豆へ流され、母との別れ】  
 【画13】

【詞下3】

ども、強ひて申せば天眼暗きにさも  
 似たり。譬へ身を碎かるとも、国土  
 の中に住む者が、何しに君を掠め  
 奉るべき。我幸ひ神通を  
 得て候へば、籠を蹴破り母を奪ひ  
 取り、飛行自在に何処へ行かんも易  
 けれども、我大願を起こし、人を化度  
 するその身なれば、国法如何で背  
 くべき。我過つて国の法を破  
 りなば、長き宗旨の誤りなり。  
 さて又一味同心と申す事、もとより出  
 里の我なれば、家を出づる輩を一  
 味と仰せ候はば、日本國の僧法師、一人も  
 漏るる者候ふまじ。この上は申し上ぐべき事  
 なしと、さも涼しくぞ宣ひける。さし  
 あたりたる道理なれば、君を始め奉  
 り、一座の公卿大臣天、晴れ有  
 難き沙門かなと、感ぜぬ人はなかりけり。  
 内よりの宣旨にはまづまづ事の実否を（後欠\*33）」



②⑦さるあひた月わかとのやためつきハ

ミ山かくれにましますかあさなゆふな  
のけふりたえさんそくこうとうせん

事もさすか又ゆミやのちしよくとお

ほしめしいかゝハせんと思ひしかいやゝ

み山かくれのかたはらに四季の花をうへ

をきてそのおりゝに手をりつゝ若

君にあつけしろかへたてまつるにある

とき月若との花そのにたちいてゝ

見たまへハそれはなハ雨露のめくミ

にてこゝろなきさうもくまでその色

ゝそおもしろき世にある人のなくさ

ミおとろふる身のよるへにハこゝろなし

とはいひなから手おる袖ハうらみそ

とよもろこしのことはにもむめをあ

にといひしハよろつの花にさきたつ

て咲とかやふゆきよりもさきそめ

て雪のうつむ木すゑにもそのかをり

かくれぬハかほよき女にたとへたり」

②⑧月しろき夜のなかにハほしともこれ  
を申なりこゝ梅うすいろ八重ひとへ

(34)さる間、月若殿やためつきは、

深山隠れにまします、朝な夕な  
の煙絶え、山賊、強盗せん

事も、さすが又、弓矢の恥辱と思

し召し、如何はせんと思ひしが、いやいや

深山隠れの傍らに、四季の花を植ゑ

置きて、その折々に手折りつつ、若

君に預け代替へ奉るに、ある

時、月若殿花苑に立ち出でて

見給へば、それ花は雨露の恵み

にて、心なき草木までその色

色ぞ面白き、世にある人の慰

み、衰ふる身の寄る辺には、心なし

とは云ひながら、手折る袖は恨みぞ

とよ、唐土の言葉にも、梅を兄

と云ひしは、万の花に先立つ

て咲とかや、冬季よりも咲き初め

て、雪の埋む木末にも、その香り

隠れぬは、顔佳き女に譬へたり。」

(35)月白き夜の眺めには、星ともこれ  
を申すなり。紅梅、薄色、八重、一重、

日影のいとミたるゝハさくらかりの  
ころなれや旅人のかさにつもる白雪ハ  
かさハおもしこてんのゆきあひハかうハし  
そちの花とよみしもかゝることをやいひ  
つらんよし野はつせの名ところよりひら  
のたかねにちる花ハさゝなミよするた  
ひことにほのうミへやかほるらん井手  
のふきさきそひて夜ハ一ときの夢の  
中さめての後ハおもふにかひもなく何  
につけてもまほろしのうせてかなハぬ  
身のはてもあるにまかせてすみれく  
さ花のものいふ世ならねとくちなしそ  
めのいろかへてさくふちなミのいろ香も  
ことにおほえてめつらしくさくやむかし  
の名にしおふ花たちはなのそのかほり  
袖の名こりもなつかしき山ほとゝきすの  
一こゑもいとゆかしきふかみ草あやめま  
こものかきつはたたそかれときのさひし」

【画下3…母と月若】【画15】

【詞下4】

②9 くきやう大臣きこしめしりんけんなる

日陰の糸の乱るるは、桜狩りの  
頃なれや、旅人の笠に積もる白雪は、  
笠は重し、吳天の雪、鞋は芳ばし、  
楚地の花と詠みしも、かかる事をや云ひ  
つらん、吉野、泊瀬の名所より、比良  
の高嶺に散る花は、小波寄するた  
び毎に、鴉（琵琶湖）の海辺や香るらん、井手  
の落咲きそひて、夜は一時の夢の  
中、醒めての後は思ふに甲斐もなく、何  
につけても幻の、失せて叶はぬ  
身の果ても、あるに任せて董草、  
花の物云ふ世ならねど、梔子染  
めの色替へて、咲く藤波の色香も  
殊に覚えて珍しく、咲くや昔の  
の名にし負ふ、花橘のその香り、  
袖の名残も懐かしき、山杜鵑（杜鵑）の  
声もいとどゆかしき深見草、菖蒲、真  
菰の杜若、黄昏時の寂し」

③8 公卿大臣聞こし召し、綸言なる

そひらに名のれとそなたまひける

月若きこしめしこのうへハ名のらてハ

かなハしとてまつすくに申あけもし

けきりんあらはいきてかひなきわか

いのちなれハ名のらはやとおほしめしハし

めをハりをそうもんあるみかとふひんに

おほしめしさてハしやうかくかおとうと成

かやけふよりしてハちよくめんありちゝか

ほんりやう給ハるなりそのうへしやうかくを

もめしかへせとのせんしにてやかてくハん

かうなされける月若ありかたし／＼と三

度いたゝき御まへをまかりたち伊つのく

にへめしのつかひを立らるゝきやうしや

よろこひいそきみやこにのほらるゝ宮

こになれハきやうたいうちつれさんたい

ありてなか／＼のさすらへさそやむねんに

思ふらん今よりしてハ國土長久に祈るへし

又月わかをハ左近衛の少将になされける」

③⑩有かたし／＼と御前を立給ひ母うへにたいめん

し御よろこひハ限なし扨行者ハ仏法くほう

の御ためにかつらきに入給ふ月若やはゝうへハ本

ぞ、平に名乗れとぞ宣ひける。

月若聞こし召し、この上は名乗らでは

叶はじとて、真つ直ぐに申し上げ、もし

逆鱗あらば生きて甲斐なき我が

命なれば、名乗らばやと思し召し、始

め終りを奏聞ある。帝不憫に

思し召し、さては小角が弟なる

かや、今日よりしては勅免あり、父が

本領給はるなり、その上小角を

も召し返せとの宣旨にて、やがて還

幸なされける。月若有難し有難しと三

度頂き御前を罷り立ち、伊豆の国

へ召しの使ひを立てらる。行者

悦び急ぎ都に上らる。都

になれば、兄弟打ち連れ参内

ありて、長々の流離へ、さぞや無念に

思ふらん、今よりしては國土長久に祈るべし。

又月若をば左近衛の少将になされける。」

③⑨有難し有難しと御前を立ち給ひ、母上に対面

し、御悦びは限りなし。さて行者は仏法弘法

の御為に葛城に入り給ふ。月若や母上は本

のあとにやかたをたてふつきにさかへ給ひける此人々の御よろこひ申ハかりハなかりけり」

【画下4…帝泊瀬へ行幸の途中、月若の花売りに会う】【画14右】

【詞下5】

③きにゆかりの人もなつかしくしつかのき

はのゆふかほ花にもまさるもみちはハ

しくれのたてに露のぬきいかにおりミン

たつた姫にしきをさらすゆふはへはむら

くはきの咲ミたれすゝむしまつむしきり

くすあれたるやとにくつわむしなくやし

も夜のさむしろにひとりぬるこそわひ

しけれまつしきものゝならひとて世に有

人にとをさかれハ誰かきてミンふちは

かましをにときけハおそろしきをとほ

の山にあらねともくねるこゝろハをミなへ

しききやうかるかやわれもかう今こそ

うき身とおもへともたれしらきくの

なからへハ世にいつる事もありやせん人々

めされ候へと花をしろかへ給ひけるこれハ

さてをきみかとはつせへ行かうなされける

御くるまのうちよりも月わかを御らんして

の跡に屋形を建て、富貴に栄え給ひける。この人々の御悦び申すばかりはなかりけり。」

【画14右】

(36)きに縁の人も懐かしく、賤が軒

端の夕顔、花にも優る紅葉ぢ葉は、

時雨の縦に露の緯、いかに織りみん

龍田姫、錦を晒す夕映えは、叢

叢萩の咲き乱れ、鈴虫、松虫、蟋蟀、

荒れたる宿に轡虫、鳴くや霜

夜の狭筵に、独り寝るこそ侘

しけれ。貧しき者の習ひとて、世にある

人に遠ざかれれば、誰か来て見ん藤袴、

紫苑と聞けば恐ろしき、音羽

の山にあらねども、くねる心は女郎花、

桔梗、刈萱、地榆、今こそ

憂き身と思へども、誰れ白菊の

長らへば、世に出づる事もありやせん。人々

召され候へと、花を代替へ給ひける。これは

さて置き、帝泊瀬へ行幸なされける。

御車の内よりも月若を御覧じて、

それわらはへのけにもやさしきうりものを  
もちけるかないかなるものそたつねよ  
とのせんしなるくきやう大臣いそき立」

③②よりいかに花うるおさなきものなんち  
はいかなるものそおやハなにといふもの  
そと仰せけれ八月若きこしめしよしや  
わか身もあさくらやきのまろとのにあらハ  
こそ名のらしものを色をもかをもしる人  
そしるらん只花うりとおほしめされ候へと  
さらぬていにておハします」

〔画下5：帝泊瀬へ行幸の途中、月若の花売りに会う〕〔画14左〕

〔詞下6〕

③③さるほとにえんのきやうしやハかつらき山に  
をこなひすましてましますか我一たひ天竺  
にわたりりやうしゆせんをおかまんとせい  
くハんふかくおハしましさんかいはるかに思ひ  
立もとよりひきやうしさいにて雲にうちのり  
さいてんちくへとわたらるゝ天竺のまわう  
共このよしをつたへきくよりもきやうしやの  
来るものならは我らのけんそくうしなふへし  
けかいのりう神をかたらひてかよひの道

それ童部のげにも優しき売り物を  
持ちけるかな。如何なる者ぞ、尋ねよ  
との宣旨なる。公卿大臣急ぎ立ち」

③④寄り、如何に花売る幼き者、汝  
は如何なる者ぞ、親は何と云ふ者  
ぞと仰せければ、月若聞こし召し、よしや  
我が身も浅倉や木の丸殿にあらば  
こそ、名乗らじものを、色をも香をも知る人  
ぞ知るらん。ただ花売りと思し召され候へと、  
さらぬ体にておはします。」

〔画14左〕

④⑤さる程に、役の行者は葛城山に  
行なひ清ましてましますが、我一度天竺  
に渡り靈鷲山を拝まんと請  
願深くおはしまし、山海遙かに思ひ  
立ち、もとより飛行自在にて、雲に打ち乗り  
西天竺へと渡らるる。天竺の魔王  
共この由を伝へ聞くよりも、行者の  
来たるものならば、我らの眷属失ふべし、  
下界の龍神を語らひて、通ひの道

をさまたけ行者をとめんといふまゝに  
たうと天ちくのさかひはん里のとゝいふ  
ところにせつなかあひたに太山をつきた  
てけり上ハ三十三天までくろかねのあミ  
をはりてまちかけたり行きや御らんし西  
天にむかつてとつゝとの給へハかたしけな  
くもいた天ハせつなかうちにあまくたり  
しゆミとひとしき大山をミちんのことく  
にふみくつし数万ちやうのてつのあミを」

③④はら／＼と引やふり心やすくおほしめせ  
いとま申て行きやとて天にそあからせ給  
ける行きやよろこひそれよりもりうさ川  
にいてらるゝこの川と申ハ三十四日にわ  
たる川にてつねに大風ふきおちていさこ  
を天に吹たつれハリうさ河とハ名つけた  
り第六天のまわうとも海中の大山を  
ハこと／＼くけくつされて又このたひハき  
まんこくのきわうらせんこくのらわうを  
かたらひいさこにつるきのひしをうへ天  
よりハくハえんの雨をそふらしけるきやうし  
や御らんし少しもさハかすしてりやうしゆ

を妨げ行者を止めんと云ふまゝに、  
唐土、天竺の境、万里の途と云ふ  
所に、殺那が間に大山を築き立  
てけり。上は三十三天まで鉄の網  
を張りて待ちかけたり。行者御覧じ、西  
天に向かつて咄々と宣へば、忝くも  
韋駄天は殺那が内に天下り、  
須弥と等しき大山を、微塵の如く  
に踏み崩し、数万張の鉄の網を」

(41)はらはらと引き破り、心安く思し召せ、  
暇申して行者とて、天にぞ上がらせ給ひ  
ける。行者悦び、それよりも流砂川  
に出でらる。この川と申すは、三十四日に渡  
る川にて、常に大風吹き落ちて、砂  
を天に吹き立つれば、流砂河とは名付けた  
り。第六天の魔王共、海中の大山を  
ば悉く蹴崩されて、又この度はき  
まん国の鬼王、らせん国の羅王を  
語らひ、砂に剣の菱を植ゑ、天  
よりは火焰の雨をぞ降らしける。行者  
御覧じ少しも騒がずして、靈鷲

せんのかたをふしおかみたまへハあらありか  
たや十六羅かんハこつせんとあらはれ  
させ給ひてひしにぬひたるけんけき佛  
りきにてうちらはひ給へハ天よりまんだ」

〔画下6：日天子に祈り天竺の魔王と戦う行者〕【画16】

〔詞下7〕

㊤それよりきやうしやはりやうしゆせんに  
なりしかはしやくそのの御すかたをこ  
かねにていうつしたる御まへにひさまつき  
給ひねかハくはしやうしんのによらいを  
おかまんとふかくきせいをかけたまへは  
ふしきやなにハかにひらんに花さき  
いきやう空にみちくゝて丈六の御すかた  
にていてたまへハあなんしやりほつもく  
れんハいきをつくろひ給ひけるさて又  
ふけんもんしゆもいて給ふ行者ハかうへを  
地につけてすいきのなみたせきあへす  
しやくそんたへなる御こゑにてなんちハ是か  
しやう佛のさいたんなりはやく日本に  
かへり仏法をひろむへし五十六億三万七  
千三えのあかつき我又しゆつけん有へし

山の方を臥し拝み給へば、あら有難  
や十六羅漢は忽然と現はれ  
させ給ひて、菱に縫ひたる剣戟、仏  
力にて打ち払ひ給へば、天より満朶（後欠\*42）

㊤それより行者は靈鷲山に

なりしかば、釈尊の御姿を黄金  
にて鑄写したる御前に跪き  
給ひ、願はくは生身の如来を  
拝まんと深く祈誓を掛け給へば、  
不思議やな、俄かに毘藍に、花咲き  
異香空に満ち満ちて、丈六の御姿  
にて出で給へば、阿難、舍利弗、目  
連は、息を繕ひ給ひける。さて又  
普賢、文殊も出で給ふ。行者は頭を  
地に付けて、随喜の涙塞きあへず。  
釈尊妙なる御声にて、汝はこれ、迦  
葉仏の再誕なり。はやはや日本に  
帰り、仏法を弘むべし。五十六億三万七  
千、三会の暁、我又出現あるべし

とかたくけいやくまし／＼て佛ハあからせ

給ひけり」

〔画下7…生身の釈尊を拝す行者〕〔画17〕

〔詞下8〕

③⑥それより行しやハ日本に立かへりかつらき  
にとちこもりふつほうひろめ給ひける  
今にいたりて山ふしのほうにハこの行しや  
よりはしまりけるありかたしとも中／＼  
申はかりハなかりけり」

と、固く契約ましまして、仏は上がらせ

給ひけり。」

(44)それより行者は日本に立ち帰り、葛城

に閉ぢ籠もり、仏法を弘め給ひける。

今に至りて山伏の法には、この行者

より始まりける。有難しとも中々

申すばかりはなかりけり。」

欠落した詞書きの補遺（ベルリン本で補った）

\* (3)あるとき、あさひ丸、父母にちかつき、われ、つら  
／＼、ういのさかいをあんするに、人間はむちうの、  
夢まほろしの中にちりんして、つるにさとりをひ  
らく事なし。我、大願をおこし、むりやうの人をけと  
せんと、おもひ立て候なり。あはれ、それかしにいと  
ま給らは、出家をとけんと仰ける。父母きこしめし、  
おもひもよらぬ事とも也。ふたりか中にたゝ一人、ま  
たともなき男なれは、しはしもみえぬ折ふしは、心を  
つくしおもふ身を、出家をとけんと申事、是におゐて  
はかなふまし、と仰ける。わか君かさねてのたまふ



は、おろかなるおほせかな。ゑいくわは是、春の花、家とみ、しそむさかゆるとも、しようじやひつめつときくときは、いきとせいける物、なとか、おはれて候へき。會者定離と聞ときは、あふはわかれのもとひ也。そのうへ、出家となれば、十そく、天に」

\* (14) ち物の、さはらずし、はしりかゝつて、ちやうとうつ。ふしきや、この太刀、すんくにおれにける。のこるやつはら、これを見て、まんなかにおつ取こめ、火水になれとせめにける。しやうかく、御らむして、あら、けうくしのありさまやと、しやくしやうを、ふらせ給へは、めんくか太刀かたな、すんくにおれて、のきにける。せんかたつきて、とうそく共、手とりでせんと云まゝに、大手をひろけてかゝりける。其時ぎやうじや、中にずんとあかり、こほくの枝にうちのつて、いかにおのれら、なにものなれば、仏法もおおそれす、神道にもしたかはす、あくきやくなす事いはれなし。一々にけころし、おもひしらせんと、の給へは、そのときとうぞく、きもたましいもうせはてゝ、かうへを地につけ、手を合、いまより後は、あくきやく仕事あらし、命をたすけてたひ給へ、けふよ

りしては、御弟子とまかり成、後世をいとなみ申さんと、ふるひく申ける。行者きこしめし、われようせうのむかしより、大慈大悲のせいくわん有て、今、佛心にいたりて、つうりきじさいの身となれり。其儀にてあるならば、爰に、かつらき、大みねとて、さしもおそろしき深山あり。この山に、ごき、せんきとて鬼あり。人間はいふにおよは(す)、」

\* (17) をけす。はつほく、てうくとして、山更にかすか也。御ともの山ふしたち、めくれ、心もうせはてゝ、あきればてゝそゐたりける。行者、御心におほしめさるゝは、ひとつのきとくを、みせんとて、谷にむかつてまねき給へは、山河一とにしんとうし、らいてん、いなつま、しきりにて、五き、ぜんき、あらはれたり。行じや、御らんじ、しやくぢやうにて、きじんのかうへをおさへ給ひ、今度はおほくの弟子をめしくせり。(筋力)くせり。山のおんなひ仕れ、すこしもそりやくして、われをうらむるな、との給へは、きしんうけたまはり、山ふしたちの手をひいて、けはしき難所をうち」

\* (21) たり給ふゆへ、此はしいまたじやうじゆせす、よを日

につゐてこのはしを、いそぎ給へと仰ける。明神はきこしめし、おほせにては候へ共、神代よりこのかた、よるはくれとも、うば

(ベルリン本、画8)

たまの、ひるは人めのはつかしさに、いつる事さらになし、ひる出る事をは、御めんあれと仰ける。行じや、おほきにいかり給ひ、天にむかつて、じゅもんをとなへ給へは、ぼんてん、たいしやく、たちまちあま下り給へは、行しや御らんし、いかに大しやく、それはからひて給はれと仰ける。大しやく、きこしめし、やかて一ことぬしをとりてふせ、たかてこてにいましめて、しんこくにつめをき、大しやくは、いとま申、行者とて、天にあからせたまひける。」

\* (27) 申さるゝ。為次聞て、あらことくしや、たとひせんしにても候へ、此為次があるうちは、ゑこそわたし申まし。あれをつちらせ、ものともと、てきみかた入みたれ、爰をせんとそ、たゝかひける。されとも、よせては大勢にて、城のつはもの、みなことくくうたれけり。ためつき、かなはしとおもひ、いそぎ母上の御前にまいり、今はかなはぬ所なり、御しかいあるへし

と申せは、はゝうへきこしめし、いかにためつき、かやうにいへは、命おしむにたれとも、まつ、あんしても見よ、しやうかくかむほんとはおほつかなし。家をはなれ、出家となりし身か、何のうらみに、よに有て、むほんをはおこすへき。是はしやうかく、よにすぐれたるゆへに、人のそねみとおほえたり。そこつにわかをしなひて、ゑきかううちのだえむ事こそ、口おしけれ。我はよめいもあらされは、ちよくめいにしたかひ、」

\* (29) さるほとに、たかまの中将重成は、みやこにもなりければ、このよしかくとそうもん有。内よりのせんじには、まつくめしこめをけとの、りんげんなり。かしこまつて候と、やがてろうしやと聞えける。母うへ、夢の心ちして、くとき事こそあはれなれ。いかなるつみのむくひにて、あゝさて、みつからほど物おもふ身はよもあらし。つまには、しゝてわかれ、しやうがくには生て別れ、せめてふたりのかたみそと、そたてをきたる月若にも別れ、我はろうしやとなりはつる。あら、さためなのうき世とて、もたへこかれてなき給ふ。

これはさてをき、富士山におはしますしやうかくは、このよしをきこしめし、」

\* (33) しらんほとは、伊豆の大嶋へ、なかしをけとの、りんけんなり。そのとき、しやうかくのたまふは、この上は、母を御ゆるし候ひて、此世のなこりに、今一度、見申たく候と、のたまへは、みかと、あはれにおほしめし、それく、ろうより出し、たいめんさせよと仰ける。かしこまつて候と、いそき、ろうより出しける。母上御らんし、あらめつらしの我子やと、おもはすしらす、すかりつき、さきたつ物はなみたなり。母上、涙のひまよりも、うらめしのしやうかくや、われは、よはひもちかつきて、あさかほの日影まつまの命也。御身、なかき行すゑの、佛法大願ある身なり。母か命をかなしみて、なにしに立出給ふそや。わらは、ろうにてしするとも、御身を、しやはにもつときは、こせをはたすけえさすへしと、すかりつゐてそなき給ふ。行しや聞しめし、仰にては候へとも、母うへ籠しやと聞からに、我身の願はともかくもとそんし、これまでまいり候也。命つれなく候は、又こそ御目にかゝるへし。いとま申てさらはとて、たち出ん

としたまへは、母上、猶もすかりつき、なけきかなしみ給ひしを、けいごの武士、をしたて、行者をとまなひ、それよりも伊豆の國へそくたりける。ともかくにも、母上、ぎやうじやの御別れ、あはれとも中く、申はかりはなかりける。」

\* (42) の雨ふりて、くわゑんはきえてうせにけり。さて、らかんたちは、行しやをさいはいましく、て、けすかことくに失たまふ。それより、きやうしやは、りやうじゆせんへと心さし、山路をさして入給ふ。まわう、猶もこりすして、鉄身、鉄毛のしとなり、

(ベルリン本、画16)

其数あまた立出て、山をつくし、地をひ、かし、天地もくたけと、さけひければ、身のけもよたつばかりなり。行じや、ことゝもしたまはず、日天にうちむかひ、めをふさき、こゝろにくわんねんしたまへは、有かたや、日天子は王子とけんし、つうりきの弓に、しんへんの矢をはけ、いさみほこるしとをもを、さんく、に射給へは、霜の日影にあふことく、ゆくゑもしらすなりにけり。」

| 上巻    |    |     | 復元の段            | 現状での位置     | 復元の順序     |
|-------|----|-----|-----------------|------------|-----------|
| 詞書第1段 | 画1 | ③②  | (2X1)           | 〔画上1〕〔画上2〕 | 〔画1 1 左右〕 |
| 詞書第2段 | 画2 | ④欠  | *<br>(4X3)      | 〔画上3〕      | 〔画2〕      |
| 詞書第3段 | 画3 | ⑥⑤  | (6X5)           | 〔画上4〕      | 〔画3〕      |
| 詞書第4段 | 画4 | ⑧②⑦ | (9X8X7)         | 〔画上5〕      | 〔画4〕      |
| 詞書第5段 | 画5 | ⑩①⑨ | (12X11X10)      | 〔画上6〕      | 〔画5〕      |
| 詞書第6段 | 画6 | ⑫欠⑪ | *<br>(15X14X13) | 〔画上7〕      | 〔画6〕      |

| 中巻 |  |  | 詞書第7段           | 画7    | 詞書第8段           | 画8    | 詞書第9段   | 画9    | 詞書第10段  | 画10         | 詞書第11段          | 画11   |
|----|--|--|-----------------|-------|-----------------|-------|---------|-------|---------|-------------|-----------------|-------|
|    |  |  | ⑬欠⑬             | 〔画中1〕 | 欠⑮⑭             | 〔画中2〕 | ⑰⑯      | 〔画中3〕 | ⑲⑱      | 〔画中4 5〕     | ⑳欠㉑             | 〔画中6〕 |
|    |  |  | *<br>(18X17X16) | 〔画7〕  | *<br>(21X20X19) | 〔画8〕  | (23X22) | 〔画9〕  | (25X24) | 〔画10 10 左右〕 | *<br>(28X27X26) | 〔画11〕 |

| 下巻 |  |  | 詞書第12段       | 画12   | 詞書第13段          | 画13   | 詞書第14段        | 画14         | 詞書第15段  | 画15   | 詞書第16段          | 画16   | 詞書第17段 | 画17段  | 詞書第18段 |
|----|--|--|--------------|-------|-----------------|-------|---------------|-------------|---------|-------|-----------------|-------|--------|-------|--------|
|    |  |  | ⑳欠           | 〔画下1〕 | 欠㉔㉓             | 〔画下2〕 | ㉖㉗㉘㉙          | 〔画下4 5〕     | ㉚㉛      | 〔画下3〕 | 欠㉜㉝             | 〔画下6〕 | ㉞      | 〔画下7〕 | ㉟      |
|    |  |  | *<br>(30X29) | 〔画12〕 | *<br>(33X32X31) | 〔画13〕 | (37X36X35X34) | 〔画14 14 左右〕 | (39X38) | 〔画15〕 | *<br>(42X41X40) | 〔画16〕 | (43)   | 〔画17〕 | (44)   |

大英博物館所蔵「ゑんの行者」絵巻（神變尊者繪傳）の法量

上巻（所蔵番号 No. 248）

題「ゑんの行者 上」（金紙墨書題簽）

見返し 26.6 cm （金箔地）

詞 1 58.6 cm 料紙 01 58.6 cm ①

画 1 55.3 cm 料紙 02 55.3 cm

詞 2 81.0 cm 料紙 03 57.6 cm ②

料紙 04 23.4 cm ③

画 2 39.2 cm 料紙 05 39.2 cm

詞 3 45.2 cm 料紙 06 45.2 cm ④

画 3 49.0 cm 料紙 07 49.0 cm

詞 4 70.6 cm 料紙 08 49.2 cm ⑤

料紙 09 21.4 cm ⑥

画 4 49.8 cm 料紙 10 49.8 cm

詞 5 73.1 cm 料紙 11 49.2 cm ⑦

料紙 12 23.9 cm ⑧

画 5 49.0 cm 料紙 13 49.0 cm

詞 6 69.5 cm 料紙 14 49.5 cm ⑨

料紙 15 20.0 cm ⑩

画 6 49.3 cm 料紙 16 49.3 cm

詞 7 81.3 cm 料紙 17 32.3 cm ⑪

料紙 18 49.0 cm ⑫

画 7 49.2 cm 料紙 19 49.2 cm

尾紙 4.4 cm

全長 851.1 cm 画と詞 820.1 cm

軸径： 2.5 cm 軸長： 34.5 cm

中巻（所蔵番号 No. 249）

題「ゑんの行者 中」（金紙墨書題簽）

見返し 26.8 cm （金箔地）

詞 1 49.2 cm 料紙 01 49.2 cm ⑬

画 1 48.8 cm 料紙 02 48.8 cm

詞 2 98.5 cm 料紙 03 49.4 cm ⑭

料紙 04 49.1 cm ⑮

画 2 49.0 cm 料紙 05 49.0 cm

詞 3 97.9 cm 料紙 06 49.1 cm ⑯

料紙 07 48.8 cm ⑰

画 3 49.9 cm 料紙 08 49.9 cm

詞 4 83.6 cm 料紙 09 49.5 cm ⑱

料紙 10 34.1 cm ⑲

画 4 46.0 cm 料紙 11 46.0 cm

詞 5 48.9 cm 料紙 12 48.9 cm ⑳

画 5 46.8 cm 料紙 13 46.8 cm

詞 6 48.0 cm 料紙 14 48.0 cm ㉑

画 6 92.8 cm 料紙 15 49.8 cm

料紙 16 43.0 cm

詞 7 65.0 cm 料紙 17 49.8 cm ㉒

料紙 18 15.2 cm ㉓

尾紙 4.5 cm

全長 855.7 cm 画と詞 824.4 cm

軸径： 2.5 cm 軸長： 34.5 cm

下巻（所蔵番号 No. 250）

題「ゑんの行者 下」（金紙墨書題簽）

見返し 26.6 cm （金箔地）

詞 1 49.5 cm 料紙 01 49.5 cm ㉔

画 1 48.6 cm 料紙 02 48.6 cm

詞 2 98.2 cm 料紙 03 49.1 cm ㉕

料紙 04 49.1 cm ㉖

画 2 48.0 cm 料紙 05 48.0 cm

詞 3 98.2 cm 料紙 06 49.3 cm ㉗

料紙 07 48.9 cm ㉘

画 3 48.4 cm 料紙 08 48.4 cm

詞 4 64.4 cm 料紙 09 49.3 cm ㉙

料紙 10 15.1 cm ㉚

画 4 48.5 cm 料紙 11 48.5 cm

詞 5 73.4 cm 料紙 12 48.4 cm ㉛

料紙 13 25.0 cm ㉜

画 5 48.6 cm 料紙 14 48.6 cm

詞 6 86.2 cm 料紙 15 46.4 cm ㉝

料紙 16 39.8 cm ㉞

画 6 48.3 cm 料紙 17 48.3 cm

詞 7 48.4 cm 料紙 18 48.4 cm ㉟

画 7 47.8 cm 料紙 19 47.8 cm

詞 8 27.0 cm 料紙 20 27.0 cm ㊱

尾紙 4.5 cm

全長 914.6 cm 画と詞 883.5 cm

軸径： 2.5 cm 軸長： 34.5 cm